シネマ探訪

奄美と映画

水野圭次郎　桑名むぎのえいが部

私が奄美に興味を持ったのは元ちとせ、中孝介、城南海というファルセットと独特のこぶしを使った「グイン」と呼ばれる奄美島唄の歌唱法を聞いたことに始まります。奄美民謡は日本民謡の南限と言われ、優れた唄者を輩出しており、多くの映画やドラマに主題歌、挿入歌として採用されています。

朝崎郁恵　『海辺の生と死』『縁 The Bride of Izumo』挿入歌
元ちとせ　『男はつらいよ　寅次郎紅の花』挿入歌　『ミヨリの森』声の出演　『苺の破片』『死に花』『初恋』『ゆずの葉ゆれて』主題歌
中孝介　『着信アリ』『KANO　1931 海の向こうの甲子園（台湾）』主題歌　『海角七号　君想う、国境の南（台湾）』『台北カフェストーリー（台湾）』出演
城南海　『つむぐもの』『月と嘘の殺人』主題歌
中村瑞希　『千年の愉楽（尾鷲市須賀利ロケ）』挿入歌

奄美大島ゆかりの人物が映画やテレビドラマになった作品には作家の島尾敏雄・ミホ夫妻の『海辺の生と死』『死の棘』、孤高の芸術家田中一村の『アダン』、西郷隆盛と愛伽那の『西郷どん』他が挙げられますが、何と言っても忘れてならないのは『男はつらいよ』です。

昭和４３年から４４年にかけてフジテレビでドラマとして『男はつらいよ』が放映され、最終回で寅さんは奄美大島の役場がハブを高値で買い取ってくれるという噂を聞きつけ、一攫千金を目論んでハブ捕りに出掛け、咬まれてあえなく死んでしまいます。妹のさくらは枕元に立った寅さんを見て悲しみに暮れ、寅さんはさくらに優しく手を振るシーンでエンディングを迎えます。ところが当時、大人気だった寅さんが死んでしまったことに視聴者から抗議が殺到し、映画『男がつらいよ』シリーズが生まれることになったそうです。

そして『男はつらいよ』シリーズの最終話となる第４８作『男はつらいよ　寅次郎紅の花』は加計呂麻島と奄美大島が舞台となりました。リリー役の浅丘ルリ子さんは奄美ロケで渥美清さんの体調が優れない様子を見て、これが最後になるかもしれないと直感し、山田洋次監督に「リリーと寅さんを結婚させてほしい」と直訴しましたが、監督は第５０作まで撮りたいという意向があり、却下されてしまったそうです。正に『男はつらいよ』は奄美に始まり、奄美に終わったと言えるでしょう。

奄美大島の古仁屋港や加計呂麻島のロケ地には『男はつらいよ』のロケ地であったことを誇るように立て看板があり観光名所と

なっています。

さて、奄美大島の名瀬に島唄と郷土料理を楽しめる「かずみ」という小料理屋があります。店主の西和美さんは奄美民謡大賞を受賞したこともある有名な唄者で、奄美民謡を聴きたいと言うと一番初めに薦められるのがこのお店です。ここから中孝介をはじめ優秀な唄者が巣立ち、奄美大島に来た映画関係者や芸能人も必ずお世話になるお店だそうです。私も名瀬滞在中には毎夜ここを訪れ、奄美ロケが行われた映画や訪れた役者さんの愉快なエピソードをたっぷりと聞かせてもらいました。

この「かずみ」の壁に湯の山温泉「希望荘」で行われた奄美フェスティバルの記事が貼ってあるのを見つけてどういうことか尋ねました。店主の言うには「希望荘」の山本会長が奄美大島を旅行で訪れた際に奄美の人たちの素朴で温厚な気質に感銘を受け、毎年、奄美高校に求人を出しており、現在では２０名を超える奄美出身者が「希望荘」で従業員として働いているのだそうです。三重と奄美大島の意外なつながりを発見しました。ちなみに山本会長は奄美大島観光大使を務められており、『２つ目の窓』の河瀬直美監督も観光大使に任命されています。

今年は奄美でロケが行われるＮＨＫ大河ドラマ『西郷どん』も放映され、バニラエアが東京や大阪から格安で航空券を発売していることもあり、奄美に熱い視線が注がれることになるでしょう。

グッドバイ！ジストシネマ

木村直史　三重フェス

２０１８年２月２０日をもって、三重県伊賀市の映画施設「ジストシネマ伊賀上野」が閉館することになりました。同じ敷地内のスーパー・オークワが２０年の賃貸契約満了に伴って撤退するためで、開館２０周年をもっての閉館となってしまいました。

私が生まれた時、伊賀市内に映画館はありませんでした。もちろん父親達の世代には、いくつも映画館があり、多くの観客でにぎわっていた話は聞いていました。しかし７０年代に全て閉館、その後伊賀市内での映画といえば、公共の会館やホールでの１日上映が主となり、いつも観られるものではなかったのです。それが２０年前、「タイタニック観てきた！」という会話が地元で何気

なく交わされるようになり、再び映画が伊賀でも身近なものとして戻ってきたのです。

そして近年、映画の地方ロケや各地域での自主上映会など、映画は観るだけでなく参加するものにもなってきました。２０１０年、伊賀地区での映画ロケ誘致・支援活動を行うべく始まったロケーションナヴィゲーター伊賀の設立総会の会場として、２０１２年にはオール伊賀市ロケが敢行された映画『Another』の舞台挨拶として原作者綾辻行人と俳優山崎賢人を迎え、さらに伊賀市出身の呉美保監督の新作公開に合わせた里帰り上映会の会場として、ジストシネマ伊賀上野は活躍しました。身近な映画館だからこそ、より映画と地域を結び付けるには最高の場所だったと言えます。

最終上映として最後の１週間は、やはり伊賀市でロケが行われた『娚の一生』が特別公開されます。劇中の買い物のシーンにオークワの一角が登場するのですが、撮影が行われたその場所で観る格別の感覚を心に刻むのもよいかもしれません。ジストシネマ伊賀上野が働き続けた２０年の間に、映画という存在も大きく変化してきました。特に、映画と伊賀地区の観客の距離をグッと近づけたことは、ジストシネマ伊賀上野の大きな功績でしょう。我々の伊賀市から映画館がなくなることは寂しいですが、ジストシネマ伊賀上野の様々な思い出を忘れないように、いつの日か再び伊賀市に映画館がオープンする日を夢見て見送りたいと思います。

ジストシネマ　ロビー